

板付周辺遺跡調査報告書

(14)

—1987年調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第206集

1989

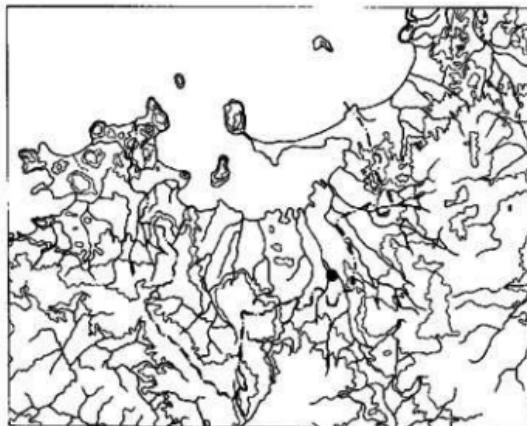
福岡市教育委員会

板付周辺遺跡調査報告書

(14)

—1987年調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第206集



遺跡調査番号 8737
遺跡略号 ITZ

1989

福岡市教育委員会

卷首図版



基本層序（調査区北壁土層、南から）

序 文

日本における初期水田跡として著名な国指定史跡・板付遺跡は、現在まで数多くの調査が行われ、その重要性を更に増しつつあります。

特に、弥生時代においては、調査された台地上の環溝、貯蔵穴群、甕棺や木棺の墓地群、更に台地周辺沖積地の水田跡をもとに、当時の生活実態が次第に明らかになってきました。

今回の調査も板付遺跡の全貌解明に向けての資料を提示するものです。

本書はこの成果を収めたものであり、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに研究上役立てれば幸いです。

調査から整理に至りましては多くの方々の御理解と御協力を賜わりましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会施設部用地計画課が計画した板付北小学校運動場造成事業に伴う遺跡調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課によって昭和62年11月7日から昭和63年1月28日まで行った。

調査組織は以下の通りである。

調査委託 福岡市教育委員会 施設部用地計画課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎

調査統括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財第一係長 折尾 学

事前審査 文化財主事 山崎純男

(試掘・協議) 埋蔵文化財第一係 大庭康時

埋蔵文化財第二係 下村 智

調査事務 埋蔵文化財第一係 松姫好文

調査担当 埋蔵文化財第一係 田中壽夫、荒牧宏行

3. 本書に掲載した遺構実測図・写真撮影は田中、荒牧、渡辺芳郎が分担で作製し、遺物実測図については荒牧が行った。

4. 本書に掲載した図面の整圖は田中克子、永瀬昭子、荒牧が分担で行った。

5. 本書の執筆、編集は田中と協議のもとに荒牧が行った。

6. 本書に使用した方位は磁北である。

7. 本書に掲載した土層図のアミ部分は砂層を表わす。

8. 記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。

尚、現場作業、報告書作製にあたり、下記の方々の協力を得ました。記して感謝します。

岩瀬史郎、熊本義徳、森山基助、山本一男、高浪信夫、馬場イツ子、

田中聖子、安増あや子、尾畠のぶえ、池見恭子、大畠ミツ子、黒木スミ子、阿部国恵、

山村妙子、西村康子

遺跡調査番号	8737		遺跡略号	ITZ (H-5 d)	
調査地地籍	福岡市博多区板付2丁目10-13		分布地図番号	24	
開発面積	800m ²	調査対象面積	440m ²	調査実施面積	128m ²
調査期間	昭和62年11月7日～昭和63年1月28日	事前審査番号	62-474		

本文目次

Iはじめ	3
II H-5d調査	4
(1) 第Ⅰ面	5
(2) 第Ⅱ面	5
(3) 第Ⅲ面	11
(4) 第Ⅳ面	11
(5) 第Ⅴ面	12
(6) 第Ⅵ面	12
(7) 第Ⅶ面	12
IIIまとめ	13
参照文献	14

挿 図 目 次

Fig.1	板付遺跡調査区位置図 (1/5000)	1
Fig.2	H-5d調査区周辺 (1/500)	2
Fig.3	基本層序 (1/20)	4
Fig.4	基本層序 (北壁土層、南から)	4
Fig.5	第Ⅰ面・第Ⅱ面全体図 (1/100)	折り込み
Fig.6	第Ⅰ面 畦畔検出状況 (南から)	5
Fig.7	第Ⅱ面全景 (西から)	5
Fig.8	第Ⅱ面 畦畔検出状況 (南から)	5
Fig.9	第Ⅱ面 東側遺構検出状況 (北西から)	6
Fig.10	SD01土層断面 (北から)	6
Fig.11	第Ⅱ面 SD01出土遺物 (土器、1/3)	7
Fig.12	第Ⅱ面 SD01出土遺物	8
Fig.13	SD01出土遺物 (瓦; 石器、1/3)	9
Fig.14	SD01出土木器	10
Fig.15	SD01出土遺物 (木器、1/3、1/2)	10
Fig.16	第Ⅲ面・第Ⅳ面全体図 (1/100)	折り込み
Fig.17	第Ⅲ面全景 (西から)	11
Fig.18	第Ⅳ面全景 (西から)	11
Fig.19	第Ⅳ面暗灰色砂層中出土遺物 (1/3)	11
Fig.20	第Ⅳ面足跡検出状況 (北から)	11
Fig.21	第Ⅴ面全景 (西から)	12
Fig.22	第Ⅴ面上層暗灰色砂層中出土遺物 (1/3)	12
Fig.23	第Ⅴ面下層暗灰色粘土中出土遺物 (1/3)	12
Fig.24	第Ⅴ面・第Ⅵ面・第Ⅶ面全体図 (1/100)	折り込み
Fig.25	第Ⅴ面下層暗灰色粘土中出土遺物	13
Fig.26	第Ⅵ面全景 (西から)	13
付図	調査区北壁土層図、調査区南壁土層図 (1/50)	

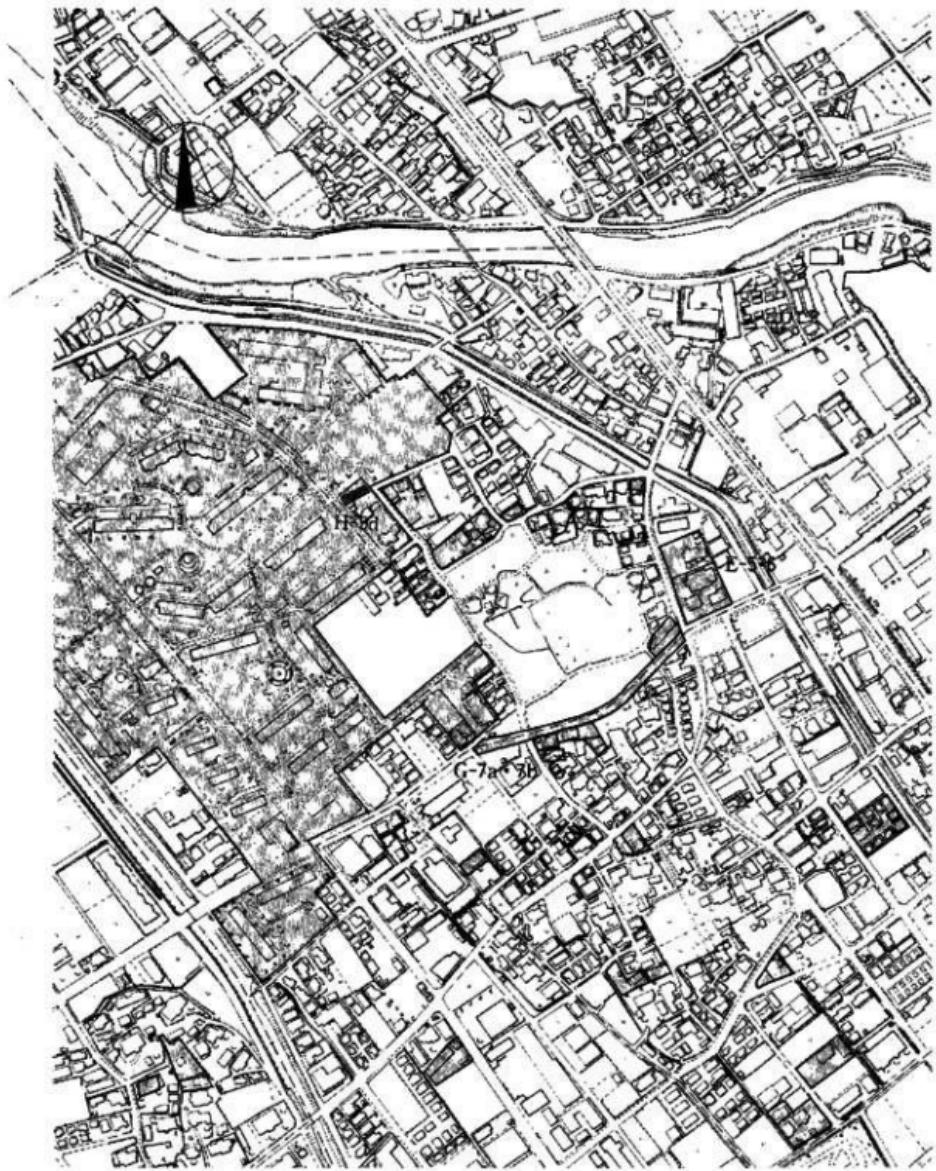


Fig. 1 板付遺跡調査区位置図 (1/5000)

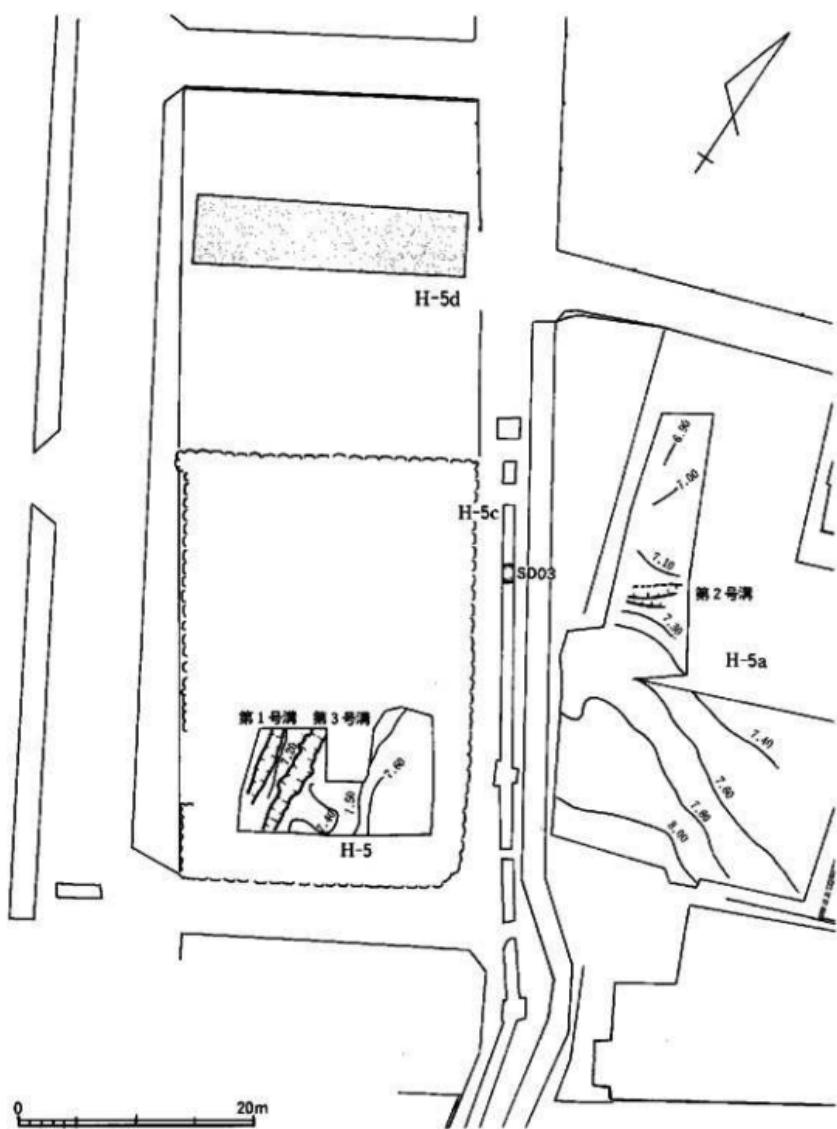


Fig. 2 H-5d調査区周辺 (1/500)

I はじめに

立地と既応調査 板付遺跡は福岡平野のほぼ中央部、御笠川と諸岡川に挟まれた中位段丘Ⅱ面とその周辺冲積地に立地する。

南北約500m、東西約120m、頂部標高10~12mの中位段丘面は2つ鞍部を挟み、3箇所の台地部に分けられる。それぞれ北台地、中央台地、南台地と呼称する。環溝は中央台地に位置する。台地部には弥生時代の墓地群や貯蔵穴群が形成されているが、調査は部分的にしか及んでいない。

台地部周辺の冲積地では、中央台地の西側と東側で水田施設の一部が確認されている。中央台地の西側冲積地、環溝から南西約50mに位置するG-7a、G-^{7b}、及び県道調査区で突帯文土器単純期、板付Ⅰ式期の水路、井堰、水口、畦畔が検出された。この中で、突帯文土器単純期の水路（幅約2m、深さ約1m）は台地西側縁辺部を北流し、その取・排水は、この水路より西方約80mに北流する旧諸岡川に求められると推定されている。

板付Ⅰ式土器期の水路も前代同様、西側縁辺部を北流する方向で検出された。更に、中央台地と南台地の鞍部や中央台地の東側冲積地に位置するE-5、6、E-5b地点でも、この時期の水路が検出され、台地東側冲積地の開田が考えられている。

H-5d付近の立地 当調査地点は北台地と中央台地の鞍部以西の冲積地に位置する。

当調査地点の南東に位置するH-5地点では、ローム層上面の標高8.0mから7.30mまで、台地が北側へ急に傾斜していく事が確認された。標高7.30mを境に傾斜は緩慢となり、この地形変換点に弥生前期の第2号溝（幅1.5m、深さ35cm）が北東から南北方向に走る。この第2号溝はH-5c地点のSD03と連絡し、中央台地の北側縁辺部に沿っている。

H-5a地点では、標高約7.40mで略南北方向に走る第1号～第3号溝が検出された。それぞれの埋没時期は第1号溝が弥生中期後葉、第2号溝は不明、第3号溝が弥生後期とする。この第1号～第3号溝の南側延長は、中央台地の西側縁辺部に沿うものと考えられるが、北側延長が北東方向の北台地縁辺部に向かうものかは未検出である。

北台地の南側縁辺部では、標高7.60m以下に層厚1m以上に及ぶ砂層の堆積が確認された。この砂層は、板付北小学校南側道路のG-4aでも確認され、北台地南側縁辺に幅20m以上にわたって、激しい流水があった事を伺わせる。

以上の事から、当調査地点の立地をまとめると1. 中央台地の北側縁辺部から、やや北側に位置する傾斜が緩慢な冲積地である。2. 水路の位置、台地縁辺部近くという立地から、弥生前期より開田されていた可能性が高い。3. 北台地南側縁辺部の砂層の堆積に見られるように、御笠川、旧諸岡川等の度重なる洪水を当調査区付近は地形的に受けやすいものと考えられる。

II H-5d調査

基本層序

調査は、主に砂層を境に7面で行った。以下、基本層序と検出面について記す。

第1層は旧水田耕作土で上面標高は8.40mを測る。第2層は褐色砂質土～砂層の床土。第3層は暗褐色粘質土で層厚30cm。更に細分できるが漸移的である。第4層は暗灰色～灰白色砂層と粘土の互層である。この第4層の下位では褐色粗砂が多い。第5層は暗灰色～黒灰色粘土。第6層は層厚4～10cmの暗灰色～黄灰色粗砂層。第7層は暗灰色粘土層。第8層は調査区北側に厚く堆積する灰白色砂層。第9層は暗灰色粘土。第10層は黒色粘土で、層厚20cmを測る。第11層は青灰白色の八女粘土。

調査区内における各土層は、水平堆積である。

検出面

以上の土層に対応して検出面の設定を行った。第I面は第3層上面(標高8.06m)、第II面は第4層上面(標高7.70m)、第III面は第5層上面(標高7.43m)、第IV面は第7層上面(標高7.10m)、第V面は第9層上面(標高6.96m)、第VI面は第10層上面(標高6.85m)、第VII面は第11層上面(標高6.60m)とした。

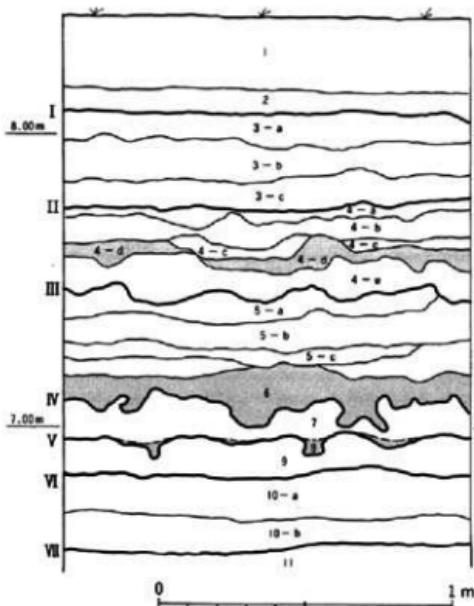


Fig. 3 基本層序 (1/20)

土層所見

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. 旧水田耕作土 | 5. 5-a 暗灰色粘土 |
| 2. 黄褐色砂層(土岸) | 5-b 褐色り暗灰色粘土 |
| 3. 暗褐色粘質土 | 5-c 暗灰色粘土 |
| 4. 4-a 灰褐色砂質土 | 6. 墓皮～灰色彩 |
| 4-b 灰褐色砂質土 | 7. 暗灰色粘土 |
| 4-c 棕色砂質土 | 8. 灰色砂 |
| 4-d 黑色土混り灰褐色粗砂 | 9. 暗灰色粘土 |
| 4-e 灰褐色砂質土～砂 | 10. 10-a 黑色粘土 |
| | 10-b 黑褐色粘土 |
| | 11. 灰白色ローム(八女粘土) |

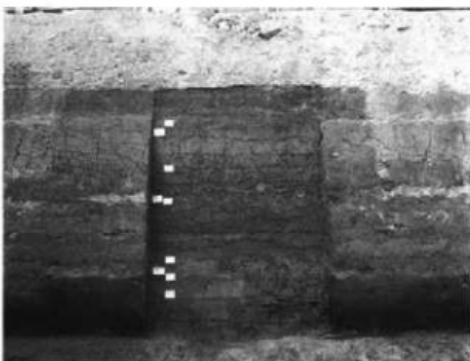
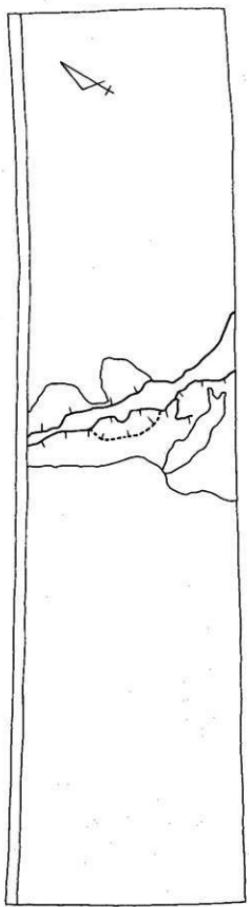
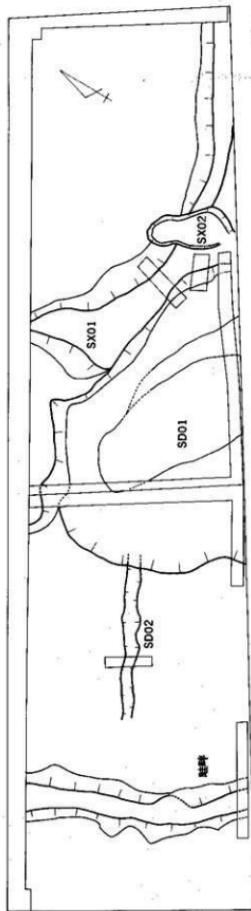


Fig. 4 基本層序 (北壁土層、南から)



F1面



F2面

Fig. 5 第1面・第2面全体図 (1/100)

(1) 第I面

第2層の床土（黄褐色砂質土）を除去した面で、標高8.04～8.07mを測る。調査区のほぼ中央で、床土とはやや異なる褐色～黄褐色粗砂を検出した。この粗砂が分布するラインは不明瞭ながら、畦畔状に略南北方向に延びる。粗砂の最頂部は、検出面より、わずかに4cm程度の比高差である。

(2) 第II面

標高7.66～7.75mである。調査区西側で検出した畦畔から中央部のSD01までの範囲に灰白色細砂の堆積が認められた。第II面はこの灰白色細砂を除去したレベルとした。しかし、畦畔より西側、及びSD01以東では灰白色細砂の堆積は認められず、ほぼ同一レベルの暗灰色粗砂混じりの粘土層上面を第II面とした。

畦畔は幅50～90cmで略南北方向に延びる。黄褐色粗砂を混じえた灰白色細砂が畦畔の上面を覆い尽くすので、その形状を明確に検出できた。畦畔上面とその基底面の上に堆積する灰白色細砂の比高差は5cm足らずで、灰白色細砂を除去した比高差はほとんどない。

明灰色粗砂（付図・北壁、4-b層）が耕土面の位置より畦畔の直下まで堆積する事から、耕土はこの層より上層と考えられる。しかし、畦畔からSD01までの堆積土は砂層と粘土の細かい互層で、畦畔および耕土は洪水によりかなり流されたものと推される。

畦畔以西およびSD01以東では、暗灰褐色細砂混じりの粘土層がレベル的に耕土と考えられるが、砂層が覆わず判断し難い。



Fig. 6 第I面 畦畔検出状況（南から）



Fig. 7 第II面 全景（西から）



Fig. 8 第II面 畦畔検出状況（南から）

SD01は調査区のほぼ中央を略東西方向に走る。調査区北壁では、幅9.0m、深さ1.10mで、基底面は八女粘土まで達する。南壁では幅、深さともに極めて減少し、幅4.0m、深さ20cmを測る。人工的な施設は何ら検出されなかった。埋土は下層～上層まで砂層と粘土の互層で流水が著しかった事を伺わせる。以上の点からSD01は自然流路の可能性があるが、狭い調査区からは判定し難い。

SD02は幅30cm、深さ5cm足らずの小溝で、SD01に切られる。埋土は灰白色細砂。

SX01はSD01の東側縁辺に沿う幅40～70cmの暗灰色粗砂層である。調査区南壁際で東側へ大きく弯曲する。SD01の堆積層か畦畔状のものか判断しかねる。SX02はSX01を切る深さ5cm程度の浅い窪みである。埋土は暗灰色粘質土。

灰白色砂層、SD01埋土中出土遺物

土器 1、2は灰白色砂層中出土。3～13以下はSD01出土。1は器形、調整方法は土師皿と類似するが、焼成は瓦質で体部内外面はやや銀化した黒色、底部内外面は灰白色を呈す。外底部糸切り、内底部はナデ、他はヨコナデを施す。推定口径9.6cmであるが小片の為誤差大。2は東播系須恵器。3は口径14.1cm、器高2.8cmを測る土師器壺。外底部糸切りで、板状圧痕が残る。内底部は同一方向のナデが明瞭に残る。4～8は瓦器碗。4は体部中位に不明瞭な屈曲をもつ。高台は磁器に似た台形状。外底面、高台とその周辺以外は細かいミガキを施す。口径16.1cm、器高5.7cm。5の体部外面のミガキはヨコ方向で、4箇所でミガキが交差する。内面はジグザグ状の粗いミガキで、体部上位にわずかなヨコ方向のミガキを施す。口径17.0cm、器高5.0cm。6は体部下位で屈曲し、内湾ぎみに上方へのびる。外面屈曲部以下には指頭痕が残る。7は体部下位で屈曲し、やや外反しながら上方へのびる。9は須恵器で、甕の底部か。体部外面は格子タタキ、体部内面はヨコナデを施し、指頭痕を有す。10は土師器高壺。11は弥生中期の甕の底部。12は板付II式、13は夜臼式の甕口縁部である。



Fig. 9 第II面 東側遺構検出状況（北西から）



Fig. 10 SD01 土層断面（北から）

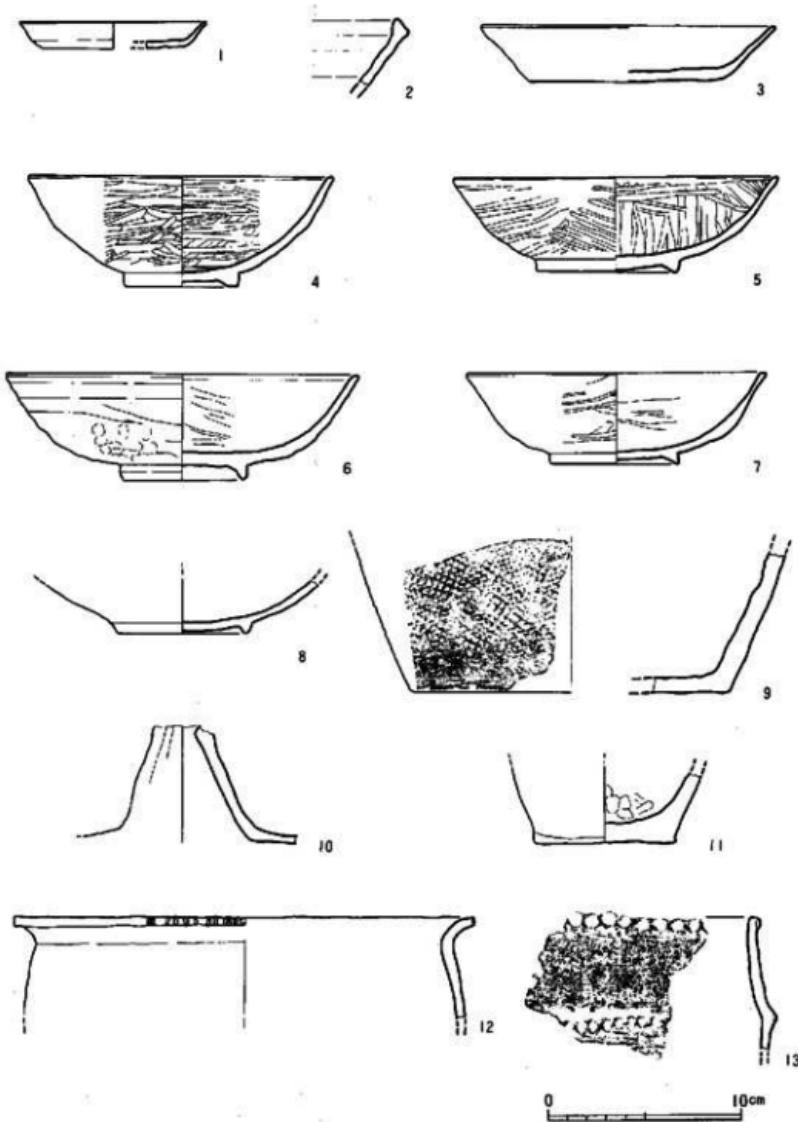


Fig. 11 第II面SD01出土遺物（土器、1/3）

II H-5d調査

瓦・石器 14は凸面に格子タタキ、凹面に布目痕。15は凸面の網目がナデ消される。凹面は布目痕。16は凸面の一部に格子タタキ、凹面には布目が残るがススが付着し不明瞭。17の凸面は網目を切る横方向の浅いハケ目を施す。凹面にも横方向の粗いハケ目の上から不定方向の浅いハケ目を施す。18、19はA、B面が磨面である。材質は18が花崗岩、19が安山岩。

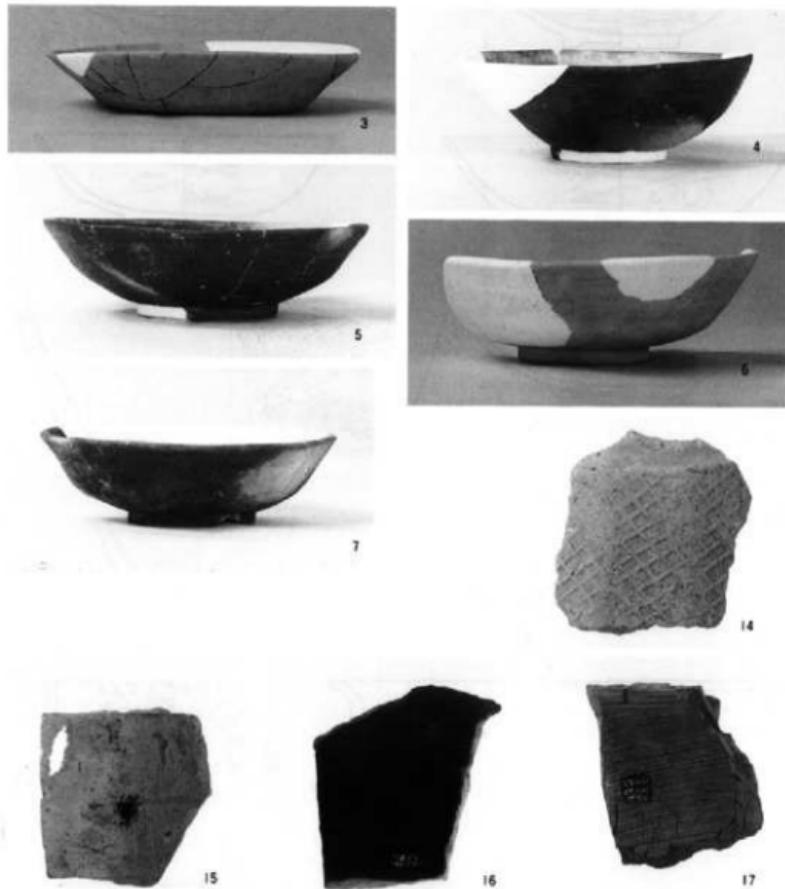


Fig. 12 第II面SD01出土遺物

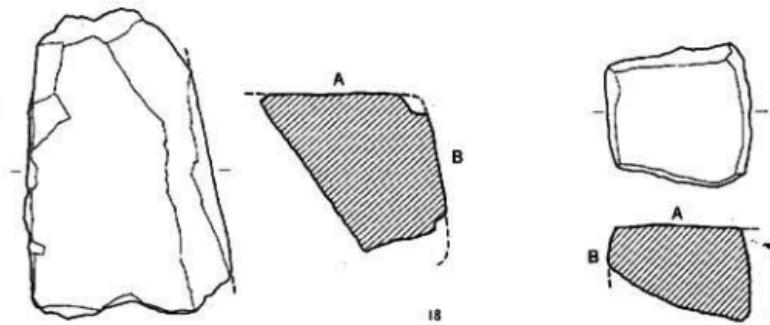
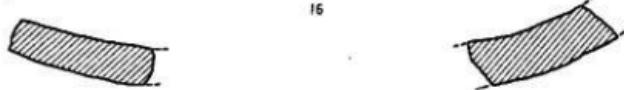
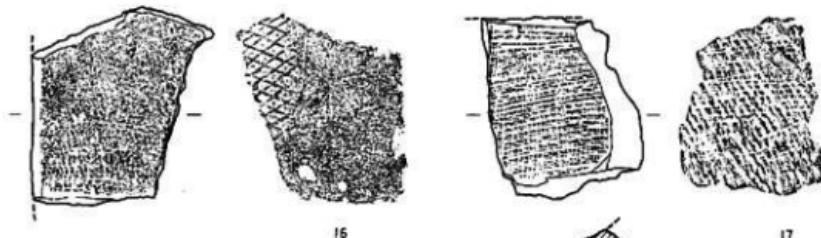
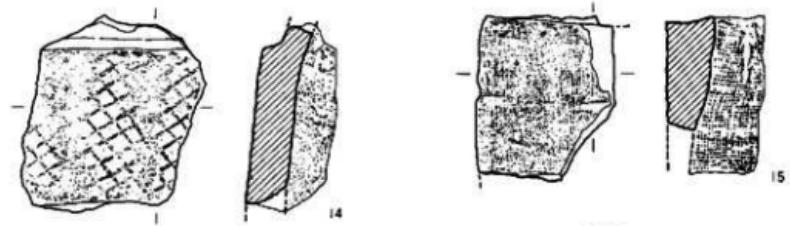


Fig. 13 SD01出土遺物 (瓦: 石器, 1/3)

木器 すべてSD01出土である。1、2は箸であろう。1は全長23.4cmを測る。3は曲物底である。復原径22cm。柄目取り。4も底板である。遺存部に有す1箇所の穿孔は潰れて不明瞭となっている。柄目取り。5は斎串で全長23.0cm、最大幅2.5cmを測る。頭部は宝珠形を為し、他端は両面から削りこまれ尖る。柄目取り。6は櫛歯が密な横櫛である。背部は直線的。



Fig. 14 SD01 出土木器

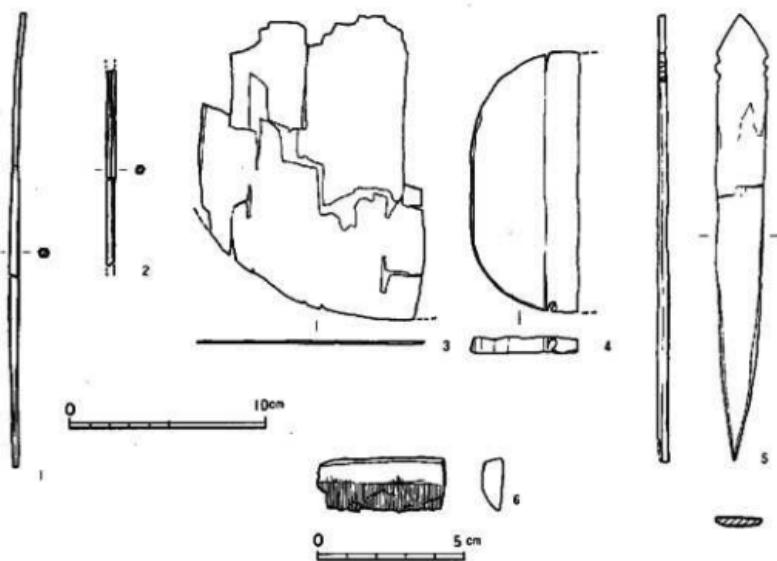


Fig. 15 SD01出土遺物 (木器・1/3、6は1/2)

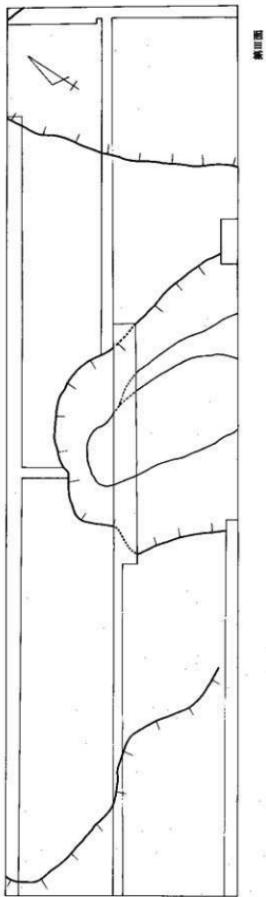


Fig. 16 素川面・精N面全剖面図 (1/100)

(3) 第III面

調査区中央部に堆積する砂と粘土の互層（基本層第4層を剥いだ面である。標高7.35m～7.45mを測る。この第III面では水田施設や足跡は検出できなかったので、ここでは土層堆積状況のみ記す。

調査区西側では、砂層が堆積せず、レベル的に合わせた粗砂混じりの黒灰色粘土上面を第III面とした。調査区中央部では、上記の粗砂層が堆積するので、下層の粗砂混じりの黒灰色粘土を比較的容易に露呈できた。SD01以東では、南壁側から北壁側にかけて砂層の堆積が希薄となる。

(4) 第IV面

検出面覆う砂層の堆積が最も良好であった。この砂層は暗灰色を呈し、調査区のほぼ全域に層厚約12cmで堆積するが、西壁近くではやや薄い。

この砂層の堆積によって、第IV面の暗灰色粘土上面では、多數の足跡が検出された。しかし、足跡の軌跡は把握できない。

暗灰色砂層中出土遺物（第IV面上面）

第IV面を覆う暗灰色砂層から少量の弥生土器細片と須恵器4点が出土した。図示できるのは1点のみ。20は須恵器坏身底部。外面回転ヘラ削り。



Fig. 20 第IV面 足跡検出状況（北から）



Fig. 17 第III面 全景（西から）



Fig. 18 第IV面 全景（西から）

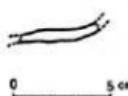


Fig. 19 第IV面 暗灰色砂層中出土遺物（1/3）

(5) 第V面

標高7m前後の暗灰色粘土上面に設定した検出面である。この第V面の上には、灰色細砂～粗砂層が堆積するが、東壁側から西へいくに従い砂層の層厚は減じる。詳細すれば、東壁際から6m程の範囲内では砂層の層厚が10～15cmと厚く堆積し、足跡が頗著に残る。しかし、この範囲の砂層は氾濫によるうねりが著しく、足跡の形状は不明瞭なものが多い。

反対側の西壁際から東へ5～6mの範囲内では、砂層が部分的に堆積するにすぎない。また、この範囲では足跡も検出できない。

第V面も第IV面同様、足跡は検出されたものの、水田施設は検出されなかった。

暗灰色細砂中出土遺物（第V面上面）

21は外面の頭部と肩部の境に沈線を有す。器面が粗れて調整不明。胎土に砂粒を多く含む。22は円盤帖り付けの底部。

暗灰色粘土中出土遺物（第V面～第VI面上面）

わずかに11点出土した。23は外面にミガキ痕、内面に若干ハケ目が残る。色調黒灰色。胎土は砂粒を若干含むが緻密。24は外面に条痕を施す。25は外面に横位の条痕を施し、内面は板

ナデか。26は夜臼式土器の底部か。外面に葉脈状の圧痕が残り、その上にミガキが施される。内面はナデ。一箇所に初の圧痕を有す。

(6) 第VI面

標高6.75m～6.85mの黒色粘土層上面である。この面よりやや上層からクラックが入る。既応の調査でC¹⁴年代が8,800～3,400B.P.とする土層に概当すると考



Fig. 21 第V面 全景（西から）

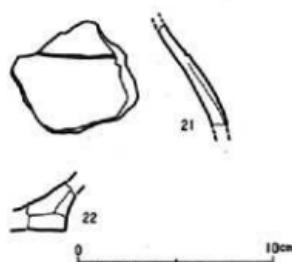


Fig. 22 第V面上 噪灰色細砂中出土遺物 (1/3)

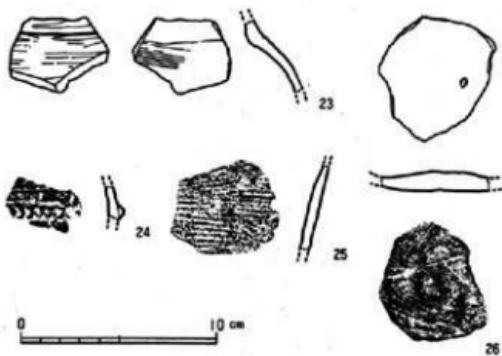


Fig. 23 第V面下 噪灰色粘土中出土遺物 (1/3)

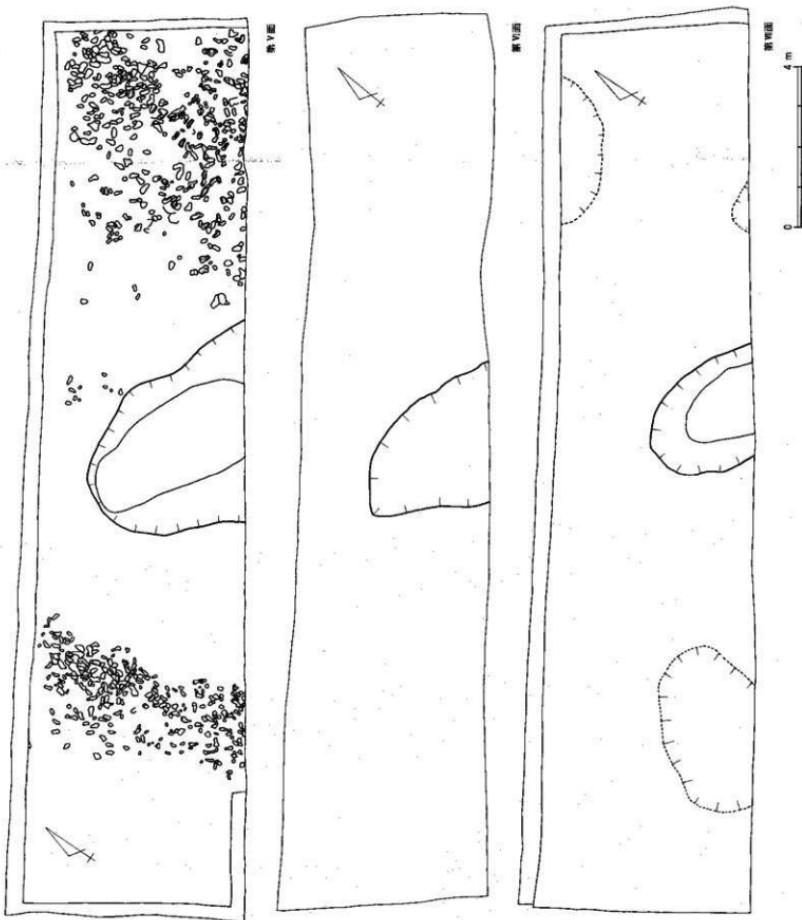


Fig. 24 索V面・索VI面・索切面 全体図 (1/100)

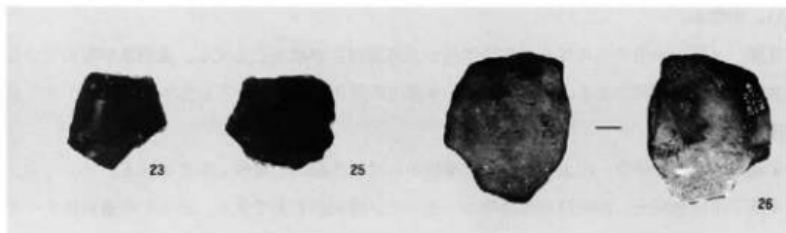


Fig. 25 第V面下 暗灰色粘土中出土遺物

えられる。遺構、遺物ともにない。

(7) 第VII面

標高6.62～6.68mの八女粘土上面である。傾斜はほとんど認められない。一部、上層の黒色土と逆転した箇所がある。

III まとめ

先述した通り、当調査は板付遺跡の沖積地に広がる水田址発掘を目的とした。沖積地の調査は過去、市営住宅建設工事に伴う調査をはじめ、数次にわたって行われたが、水田址の面的な広がりを把握するには至っていない。当調査地点の中央台地、北西落ち際においても、下水道工事に伴う調査など、トレンチ程の調査は行われたが、未だ水田址の状況を把握するには程遠い。当調査も面積約130m²と狭いものであるが、今後の調査の指標になるよう、ここで、検出面の時期、既応調査との照合を中心に若干述べておきたい。

検出面の時期と遺構について

第I面 床土直下の検出面で、第II面の中世以降としか判断がつかないが、現代に近いものであろう。床土上面から基本層序第3層の上面まで、砂質土～砂層の堆積で、現在の水田に落ちつくまでに過去幾度と擾乱を受けたものと考えられ、検出された畦畔状の遺構もその経緯の中で残存したものであろう。

第II面 この面からは畦畔1条、溝(SD01)を検出した。埋土中から出土した遺物の時期は12世紀中頃を示すと考えられる。従って第II面は大略中世段階であろう。なお上層の基本層序第3層(客土、流れ込みの両意見がある)からは既応の調査で弥生～中世までの遺物を包含する。

第III面 第II面から堆積する砂層を除去した検出面で、第II面を大きく遡る時期とは考えられ



Fig. 26 第VII面 全景(西から)

ない。中世か。

第IV面 上層の砂層中からは6世紀後半代の須恵器細片が数点出土する。遺物量が極めて少ないので時期比定は困難である。尚、IV面下～V面上の暗灰色粘土中からは弥生土器のみ小片7点が出土した。

第V面上暗灰色細砂中 出土した10点の遺物からは弥生前期の堆積と推定される。

第V面下暗灰色粘土 総数11点の遺物が出土した。時期が判断できる、図示した遺物はすべて夜臼式のものである。

その他

当調査の成果を以下まとめておく。

1. 第II面より中世の水田址（畦畔1条）を検出した。板付遺跡においても今後、中世段階の水田址が検出されると考えられる。尚、同じ御笠川、諸岡川の下流域、板付遺跡の北西約400mの那珂若休、那珂久平遺跡においても中世の水田址が検出されている。

2. 第V面（標高7m）は弥生前期と考えられるが、この面では足跡のみ検出され水田施設は確認できなかった。しかしH-5c地点で検出された前期の溝と30mしか離れてない事から弥生前期には開田されていたものと考えられる。

以上、今後の調査を持つ事が多いが、特に中央台地と北台地の鞍部付近では、板付北小学校調査で認められたように洪水の流水路となり易い為、水田址の検出に有効な砂層の堆積が良好である。従って、この付近では水田址が良好に残っている事が期待できる。

参 照 文 献

I

- 注1 『板付周辺遺跡調査報告書（5）』 福岡市埋文報第49集 1979
 - 注2 『県道505線断続改良に伴う発掘調査報告書（2）』 福岡市埋文報第48集
 - 注3 山崎純男「北部九州における初期水田」『九州大学文学部九州文化史研究所紀要』第32号 1987 P-135, 137
 - 注4 『板付周辺遺跡調査報告書（4）』 福岡市埋文報第38集 1977
 - 注5 『板付周辺遺跡調査報告書（6）』 福岡市埋文報第171集 1987
 - 注6 『板付周辺遺跡調査報告書（4）』 前掲
 - 注7 『板付』市宮住宅建設とともに発掘調査報告書 1971～1974 福岡市埋文報第35集 P-76
- なお、既応調査の位置及び遺構図は『板付周辺遺跡調査報告書（13）』の付図及び（山崎 1987）（前掲）に詳しいので参照されたい。



調査区近景（西から）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第206集
板付周辺遺跡調査報告書(14)

1989年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市天神1丁目8の1

印刷 株式会社 チューエツ
